

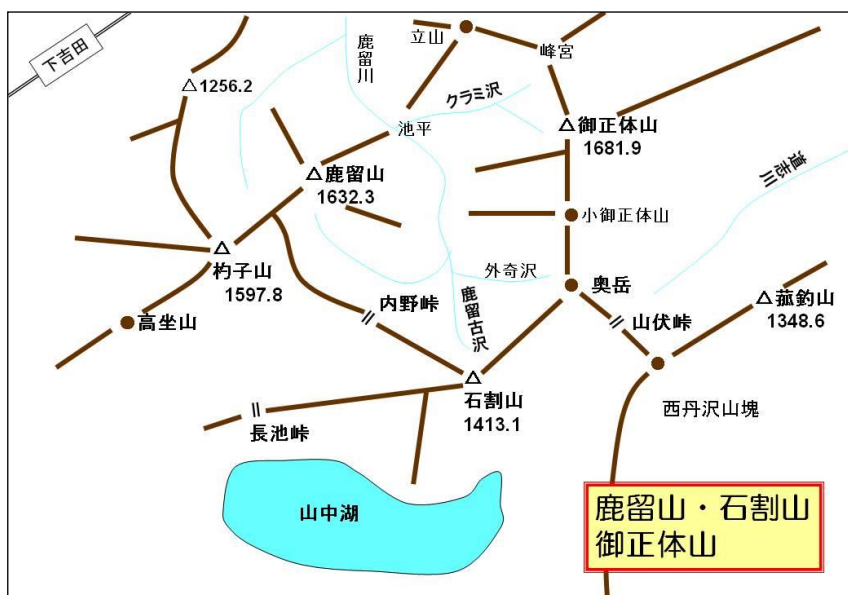
道志山塊	御正体山・石割山から内野へ	No. 035
------	---------------	---------

静岡県に生まれ育った私にとって、富士の見える景色は他の何にも勝る素晴らしいものである。きわめて自分勝手な言い分を述べさせていただくなら……、

「富士万景の中でもっとも素晴らしいのは駿河湾沿いの浮島沼の逆さ富士、単調な円錐形の山にひとつの強烈なアクセントを付けている宝永山の突起、これが一番。第二は甲斐へ回って南都留は忍野村、自衛隊の演習場で有名なこの地から見る富士は、長い裾を引いて高くまた気高い。但しまだ写真でしか見たことがない。第三に、これも駿河の富士宮の北、大石寺のあたり。この地からの富士はど真ん中に一日として休むことなく落石が続いている富士宮大沢が裂くように入っており、これも前に述べた宝永山同様になくはないアクセントになっている。これと同じく大沢を見せる富士は、身延線の富士根・芝川間からも見られる。身延線の線路は北へ西へ南へ、また北へと蛇行しており、手前の低山が邪魔をして富士は見え隠れし、ハラハラドキドキ……。これが第四の富士だろうか」

第一の景色は産声を上げてから十年余の間眺め暮らしてきたのでさておき、第二の富士を拝まんと、忍野村の東北東の石割山、御正体山の二峰を狙うことになった。

御正体山は1681.9m、東に道志川、西に鹿留川を発し、鹿留川の対岸には鹿留山1632.3mが耐えず眺められる。石割山は御正体山の南南西に位置し、標高1413m、眼下に大きく広がる山中湖が楽しみのひとつだ。メンバーは恩田と加藤、いつもの列車で出発。



昭和39年11月7日

23時45分発長野行はやはり満員だった。辛うじて洗面所（便所ではなく手洗い所）に席を確保した。

昭和39年11月8日

大月1時48分着、富士急行の一番電車（2時20分発）に乗り込み、菓子パンを数個ずつ食べて腹の虫をなだめる。

富士山へ行くのだろうかピッケルを持ち、堂々と眠っている連中、三つ峠へでも行くのだろうかキャツキャツ騒いでいる連中、それに河口湖か富士急ハイランドへでも行くのだろうかウイスキーを飲みながらバカ話をしている連中、客層はおおかた三種に分かれる様子だ。我々はそのどこにも入らない。しょぼつく眼で時々停車する駅名を気にしながら……。約20分で東桂に到着。我々三人を含め四人の客が下車した。

電車が走り去ると、夜明け前の駅舎はまたひっそりと静寂に戻った。

3時出発、星屑の輝く空の下を、時にはウトウトしながら鹿留川に沿って約三時間、あたりの景色が朝の光にはっきりと見える頃にクラミ沢の出合いの池平（いけんたいら）に到着。6時、ここで予定通り朝食。

ゆっくり朝食をとってエネルギーを確保して8時に出発。クラミ沢沿いの木馬道は歩きにくくて嫌になった。

小尾根に取り付き峰宮の北西の肩に出る（10時）と苦しい登りが待っていた。

マコゼンの丸とも呼ばれる御正体山山頂は1681.9m。東に道志川を挟んで丹沢の山々が、大室山、犬越

踏み跡 < My mountains >

路、桧洞丸、石棚山稜、蛭ヶ岳、丹沢山……。西に富士と三つ峠の間に南アルプス北部の山々、農鳥岳、間岳、北岳、鳳凰三山、甲斐駒。富士は仰ぎ見るように高い。みかんを食べてひと休み。

御正体山は、古くは養蚕の神とされていて、御正体権現が祀られて江戸時代には信仰登山の対象になった。御正体山からさらに尾根を南へ進み、小御正体山で

11時半から12時半までパンとコーヒーの昼食。奥岳で山伏峠への尾根を左に送って14時20分に石割山に到着。御正体山から二時間の行程。残りの食糧を片付けながら15時まで休憩。来し方を振り返れば、御正体山はすでに遠く、また鹿留川を挟んで西に鹿留山、杓子山。杓子山の南麓に広がる内野、忍草の集落の家並みまで鮮やかに眺められる。南に見える山中湖は予想以上の広さと大きさ。食糧を片付けて軽くなった荷物で忍野村の内野へ一時間の下り。途中で



道が判然としない所があったが、実景もよく見えるので地図と磁石の力を借りて藪漕ぎして解決。高度を下げるにつれて段々に富士は仰ぎ見るような高さになり、やがて開拓地の畑の中の本道を歩く頃には期待していた忍野からの富士が今までに見た景色と寸分もたがわずに目に入ってきた。やはりこれは第二番目の富士だ。

内野発16時20分のバスに乗り、富士吉田から17時19分発の電車に乗って帰った。

以上

(修正・更新:2023年10月)